

平成18年4月28日
千葉市環境局環境保全部
環境保全推進課 自然保護係
電話 245 - 5187

「大草谷津田いきものの里」のオープンについて

千葉市若葉区大草町及び北谷津町の一部に整備を進めていた「大草谷津田いきものの里」が完成し、5月20日（土）にオープンする運びとなりましたのでお知らせします。

1 整備目的・目標

- （１）大草谷津田いきものの里は、本市が進める谷津田保全のモデル事業として位置付け、ふるさとの原風景であり多様な生態系を有する谷津田の自然を保全し、市民が身近に自然とふれあい自然について学ぶ場を提供するため整備した。
- （２）市民、農家、専門家、学校、行政など多くの主体が連携して自然再生に取り組んでいくため、関係者で話し合い具体的で分かりやすい目標づくりを行った。

長期的な目標：コウノトリと共生する里づくり

短期的な目標：ホタルやメダカと共に暮らす里づくり

2 名 称

大草谷津田いきものの里

3 所 在 地

若葉区大草町及び北谷津町の一部

4 計画面積

約26ha（谷津田及び周辺樹林等）

5 自然環境

大草谷津田いきものの里は、谷津の地形が改変されず、湿田・湧水・土水路等の伝統的な水田環境や、雑木林・照葉樹林・竹林等の自然環境が良好な状態で残されている。

こうした環境に適応してニホンアカガエルやヘイケボタル、リンドウやヤマユリなど、千葉市レッドリストで「A：最重要保護生物」に選定されている希少な野生動植物が数多く生息・生育している。

6 整備内容

(1) 自然再生ゾーン

谷津田や樹林等からなる谷津の環境を復元・整備した。谷津田再生エリアでの田んぼづくり、樹林再生エリアでの森づくりが体験できる。

谷津田再生エリア(約1.5ha): 湿田、畦、土水路、湧水、湿地等

樹林再生エリア(約1.5ha): 雑木林、竹林、斜面林、炭焼窯跡等

(2) 自然観察路(約1.5km)

四季折々の自然とふれあい親しめるよう自然観察路を整備した。コースの見どころには自然解説板を設置し、一人でも自然や生き物について学ぶことができるセルフガイド方式を採用した。

観察路: 未舗装、一部チップ敷き・木製階段

標識板: 総合案内板2基、解説板10基、方向指示板10基、注意標識7基、制札2基

(3) 入口広場(約1,500㎡)

駐車場17台(砂利舗装)、水洗トイレ(大2、小1)、詰所、倉庫、足洗い場等

7 保全手法

土地所有者との保全協定による(協定締結者には、年額10円/㎡の奨励金を交付)

8 事業費 約6,700万円

9 利用案内

(1) 鉄道

千葉都市モノレール千城台駅から1.2km、徒歩18分

(2) バス

JR千葉駅又は千城台駅から、京成バス「千城台車庫」行で終点にて下車、徒歩4分。又はJR千葉駅から、ちばフラワーバス「中野操車場」行、ちばシティバス「いずみ台ローズタウン」行で「大草」にて下車、徒歩10分

(3) 駐車場

17台(無料) 9:00~17:00(11/1~3/31は9:00~16:30)

駐車台数が少ないため、できるだけ公共交通機関を利用のこと。

10 開園記念式典

(1) 日時 5月18日(木)10:00~11:00

(2) 場所 大草谷津田いきものの里入口広場

(3) 次第 市長あいさつ、感謝状贈呈、テープカット、記念田植え など

1 1 開園記念行事（要事前申込）

- （１）日時 ５月２０日（土）９：３０～１１：３０
- （２）集合 大草谷津田いきものの里入口広場
- （３）内容 自然観察路及び自然再生ゾーンでの自然観察会
- （４）対象 市内在住・在勤・在学の方（小学生以下は保護者同伴）
- （５）定員 ７０人（応募多数の場合は抽選）
- （６）申込 ５月１０日（水）（必着）までに、往復はがきに、参加者全員の住所、氏名（ふりがな）、電話番号、年齢、返信用のあて先を明記して、〒２６０－８７２２千葉市役所環境保全推進課「自然観察会」係へ郵送

1 2 今後の予定

（１）管理運営

ア 地権者、地元住民、市民団体等を含めた市民、学校関係者、専門家、行政の連携による管理運営体制「大草谷津を育む会（仮称）」の構築を目指し、大草谷津田いきものの里の事業を推進していく。

イ 当面、谷津田や樹林の維持再生、生物モニタリング調査、自然体験学習等の活動は、ボランティアを主体とした田んぼづくり、森づくり、生物環境調査等の事業部会を中心に運営していく。

ウ 入口広場や自然観察路等における清掃・草刈・巡視等の基本的な維持管理は、地域住民や地権者による地元管理組合への業務委託により実施する。

（２）順応的な管理による自然再生

平成 15～17 年の３年間、専門家や市民と連携して自然環境モニタリング調査を実施し、その結果に基づき植生及び水環境の目標を立て、自然再生ゾーンの初期整備を行った。

今後も市民参加によるモニタリング調査を実施することで、当初の整備・管理目標を点検・評価し、その結果を維持管理に反映させる順応的な管理手法により自然再生を行っていく。

（３）人材育成

ア 谷津田や里山の維持・復元、生物モニタリング調査、自然体験指導等の活動を担う人材を育成するため、谷津田ボランティア育成講座「大草谷津学校（仮称）」を継続的に行っていく。

イ 育成した人材は、いきものの里だけでなく、谷津田の自然の保全に関する要綱に基づき指定した「谷津田等の保全区域」での保全活動に活用していく。

【案内図】



【現況写真】



自然解説板



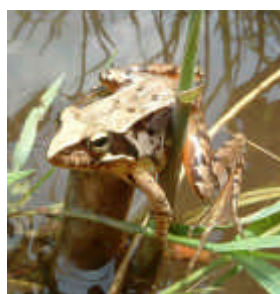
谷津田再生エリア



子供たちの自然体験（田植え作業）



ボランティアによる森の手入れ



ニホンアカガエ



ヘイケボタル



ヤマユリ



リンドウ



大草 谷津田いきものの里 総合案内板

Okusa Yatsuda Ikimononosato

～人と自然が共生する、生き物の宝庫～

事業の趣旨

長年にわたり地域の方々の営みの中で維持されてきた大草の谷津は、都市に残された奇跡ともいえる貴重な自然です。

いきものの里は、昔ながらの谷津の自然を守り育て次代の子供たちに引継ぎ、皆さんが自然とふれあい学ぶ場として利用するため、土地所有者の方々の善意により期間を定めてご協力いただき整備したものです。

利用の案内

いきものの里では谷津田や樹林などの様々な環境を利用して多くの生き物が暮らしています。谷津の自然を観察して歩けるよう自然観察路(約1.5kmのコース)を設けました。

コースの見所には解説板があり、自然や生き物について学ぶことができます。なお、動植物保護や生活環境保全のためコース以外の樹林や田畑への立入りはご遠慮ください。

いきものの里事業が目指すもの

いきものの里では長期的・短期的な目標を定め、自然再生の事業を進めていきます。

【長期的な目標】
コウノトリと共生する里づくり
 大草の連葉谷津には昔コウノトリが営んでいた言い伝えがあり、その時代の自然再生を目指します。

【短期的な目標】
ホタルやメダカと共に暮らす里づくり
 ホタルが舞いメダカが群れる環境は健全な谷津田の象徴であり、そうした自然の再生を目指します。



※ 計画区域の大半は、谷津田等の保全指定区域ですが、一部は保存樹林となっています。
 ※ 本事業は、ちば環境再生基金の市町村による戦略的自然再生事業の助成を受けています。

大草谷津周辺の今・昔

昭和23年(1948)の写真を見ると、都川沿いと北側に大きく入り込んだ谷津沿いに水田が広がり、集落は東金街道沿いを中心に展開しています。台地は開墾された畑地と山林が入り交じり、農村的な土地利用になっています。

平成8年(1995)の写真では、北側の台地に住宅地(昭和40年代に開発)が広がり市街化が谷津周辺まで迫っています。連葉谷津では水田の休耕や耕作放棄が目立ちますが、集水域の土地利用は昔に近い姿をとめています。



連絡先: 千葉市環境保全推進課 tel.043-245-5187

農作業の一年と生き物のかかわり

水田環境は春の田植えからイネの成長に合わせて、季節ごとに違う顔を見せます。
特に谷津田は狭い範囲に人の手によって様々な環境が作りだされており、これらの環境は生物にとっての多様な生活の場ともなります。農作業暦にあわせて、生物と人間の関わりを紹介します。

コサギ

田起こしの人の後ろを歩き、飛びついて虫を食べています。



8. 田起こし (秋起こし) (10月下旬)

わらと土がよくまざり土壌が肥えるように、また、土がやわらかくなるようおこないます。雑草防止の目的もあります。



7. 収穫 (10月)

乾燥した稲は足踏み脱穀機で脱穀し、カラウスにかけてもみがらを取り除いた後、唐箕で選別して俵につめます。残ったワラは縄などの材料になる他、肥料や堆肥としても利用されました。



アキアカネ

夏は涼しい山などで過ごし、秋になると集団で集まってきて、水田などの水際に産卵します。



ショウジョウトンボ

成虫すくもと体全体が赤くなり、足は茶色の間に黒い帯が通ります。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
雪の 米づくり期 (田田)	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田
雪の 米づくり期 (乾田)	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田
雪の 米づくり期 (乾田)	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田
アカガエル	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田	田田

2月～3月



アカガエルの卵塊

アカガエルは水田の水際や田の隅に卵を産みます。水田の乾燥とともに減少しています。



タネツケバナ

水田周辺でよく見られます。もみ(稲の穂)は田代にまく前に水に浸けておきますが、その際に花が散るのでこのようになるのです。

3月下旬～4月上旬



ヒキガエル産卵

流れのない場所には産卵せず、水が流れる水田は産卵場所として最適です。



アカガエル幼体

水田の隅ではアカガエルの卵から生まれたばかりの幼体がいます。



1. 田起こし (春起こし) (3～4月)

春先に行う一番最初の田仕事です。肥料と土がよくまざるように、また、土がやわらかくなるようおこないます。前年の稲わらや稲かぶを分解しやすくする効果もあります。

稲作の一年



2. 苗代 (4月上旬)

田の水の入りやすいところに苗代をつくり、稲の苗を育てます。



3. 代かき (5月上旬～中旬)

本田ではマンガワで土をくつき、そのあと平らにして稲を植えやすくします。田植えまでに2回行います。



4. 田植え (5月中～6月上旬)

苗代で育てた稲の苗を水田に植えます。



シュレーゲルアオガエル卵塊

水田の土手や溝に産卵します。卵から生まれたばかりの幼体がいます。



アカガエル産卵

このころになるとアカガエルの卵が田の隅に産卵し、田植えのあとには田の隅に産卵します。

5. 草取り (5月下旬～8月)

水田の草取りは収穫量を増やすために重要な仕事です。通常は3回行います。



オニヤンマ

日本産のトンボの中で最大。水のきれいな小川や湧き水が流れ込む水田に産卵し、幼虫は水中で4～5年ほど生活します。



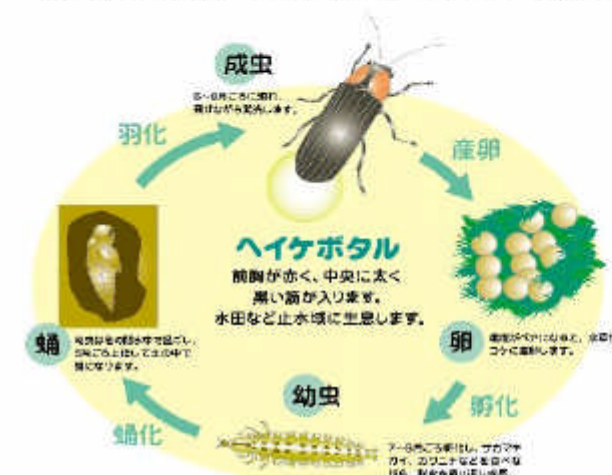
イチヨウウキコケ

日本産唯一、水田に寄生して生活しているコケです。曹から秋にかけて水田に生え、秋になると水が干上がり後は枯死してしまいます。農薬の影響により減少しています。

ヘイケボタルとアカガエル

谷津田には水田や湧水による湿地、周辺の雑木林があり、これらは様々な生きものが生息するのに、欠かせない場所です。

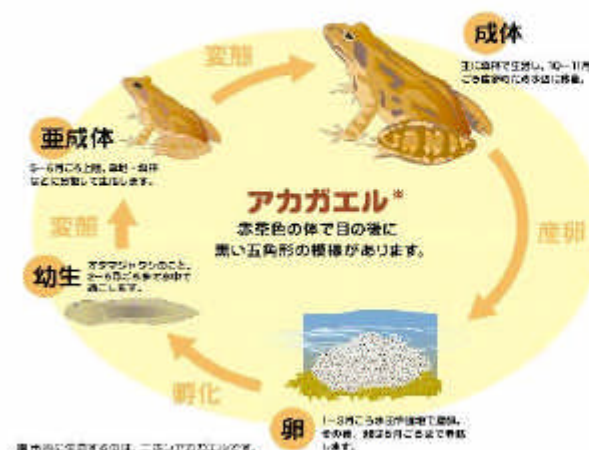
ここでは谷津田の生きものの代表としてヘイケボタルとアカガエルについて紹介します。



昔ながらの農作業とヘイケボタルのかかわり

1. 代かきは、ヘイケボタルの幼虫やその餌となる貝の天敵（ヤゴやザリガニなど）を一気に減少させます。
2. 水田管理のための畦取りで、幼虫が上陸して蛹になるときに都合の良い養分が与えられます。
3. 稲が生育して水田一面を覆うようになると、幼虫や餌の貝が天敵である鳥類から身を守ることができます。
4. 施肥は水田の養分の増殖を促進し、それを餌とする貝類も増えるので、幼虫の餌が十分に確保できます。

機械化し農業を多用する近代的農法が行われている水田では、ヘイケボタルは生息しにくくなっています。休耕田では、休耕の1年目では前年と同じくらいの成虫が発生しますが、その後年を追うごとに成虫の発生数は少なくなっていくという事実が報告されています。



ボタルとカエルが減っている?!

農薬

毒性の強い殺虫剤が大量にまかれると、ヘイケボタルは死に、他の昆虫を餌とするアカガエルも減少します。

乾田化

乾田化がすすむと、アカガエルの産卵時期である早春に水が溜っている水田が減少します。そのため繁殖場所が失われ、個体数が減少します。

ヘイケボタルは、餌である貝類が乾田化によって減少したり、幼虫の生息場所がなくなったりすることで減少します。

耕作放棄

草が茂り日当たりが悪くなるため餌が育ちにくくなります。

谷津の自然と昔ながらの農作業を守ることは
谷津の生き物たちを守ることに繋がります。